センターだより

第84号
発　行
平成28年1月

ときめき作品展　大賞受賞作品

目次

- 新年を迎えて …… 2
- ５０回目を迎えた南部小学校との交流 …… 3
- ときめき作品展大賞受賞 …… 4
- 第３５回大分国際車いすマラソン大会 …… 5
- 小学生に対する福祉体験学習 …… 5
- 第8回“ＬＥＳＰＯ ＣＵＰ”ボッチャ大会 …… 6
- 第13回大分かぼすカップ車椅子ツインバスケットボール大会 …… 6
- 第２４回文化祭 …… 6
- 第１５回全国障害者スポーツ大会（「紀の国わかやま大会」） …… 7
- 「紀の国わかやま大会」に参加して …… 7
- 終了者の状況、利用者募集のご案内 …… 8

指定障害者支援施設
国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局
別府重度障害者センター

新年を迎えて

所長　石渡　博幸

新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましてはつつがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中は関係機関、地域住民の皆様など多くの方々のご支援をいただき、厚くお礼申し上げます。

この冬は、暖冬といわれており、「九州は温暖」というイメージを持って転勤してきた私ですが、昨年末にはセンターの後ろにそびえる鶴見岳の斜面がうっすら白くなる日もあり、九州の冬の寒さを実感したしだいです。

さて、昨年もセンターでは様々な行事や出来事がありましたが、特に、1966年から続いている、竹田市立南部小学校との「蛍の交歓会」が多くの関係者の方々のご尽力のおかげをもって、50周年を迎えることができました。一匹の蛍の明かりは小さく、はかないものですが、脈々と受け継がれてきた蛍を通じてのこの交流は、障害者に対する理解を深めていただく大切な場となっているとともに、南部小学校の皆さんとセンターの大きな絆となっています。

本年4月から、「障害者差別解消法」が施行されますが、法律があるから、義務だからではなく、何らかの障壁がある人たちと互いに尊重し合いながら共に暮らしていくためにはどのようにすればよいのかと、自然に考えられる日本になればと思っています。そのために、次世代を担う子供たちに、障害者の方々のことを知ってもらうことは、大変重要なことであると認識しており、蛍の交歓会の他、昨年も、職員だけでなく、利用者の方々にもご協力をいただき、地域の小学校へ福祉教育のお手伝いをさせていただきました。

また、大分国際車いすマラソン大会において、最も障害レベルの重いクラスでのハーフマラソンに、3名の利用者の方々が参加され、1名の方が完走されました。何ヶ月も前から基礎トレーニングや屋外の走行練習などを経ての参加でした。この体験が地域に戻られてからも、きっと生かされていくものと思っています。加えて、11月に開催された「平成27年度ときめき作品展」の絵画部門で、168点の応募の中から、栄えある大賞を利用者の方が受賞されました。平成25年度以来2人目の快挙です。

このような利用者の方々の、ひたむきに取り組む姿勢に頭が下がる思いですし、利用者の皆さんが多くの可能性を持っておられることを再認識するとともに、職員の日ごろの支援の成果の一端が伺えるものであると思います。

さて、国立施設全体では、現在頸髄損傷者を主たる対象として支援を行っている機関は、当センターの他、静岡県の伊東重度障害者センターと埼玉県所沢の国立障害者リハビリテーションセンターの3ヶ所ですが、本年7月をもって伊東センターと所沢のセンターが統合され、当センターと2ヶ所となる予定です。

今後、当センターに求められる役割は益々大きくなり、利用者の皆さんに対する直接的支援の更なる充実は元より、当センターが持つ様々なノウハウなどについても、できる限り発信するなど、国立機関としての役割を果していく必要があります。その一環として「在宅生活ハンドブック」を作成し、頸髄損傷者ご本人やご家族、関係者に活用いただけるようホームページに掲載しましたので、活用いただければ幸いです。

最後になりますが、当センターの運営に当たりご支援をいただいております関係機関や地域の皆様並びに、新米所長を支えてくださった利用者、職員の皆様に感謝しつつ、本年もよろしくお願い申しあげます。

50回目を迎えた南部小学校との交流

昭和41年に当時の竹田市議会議長　菅八郎氏（故人）と同夫人が上京途中の夜行列車の中で、当時の当センター所長　角田耕一氏（故人）と知り合ったのが機縁となり、竹田市立南部小学校とセンターとの間で受け継がれてきた交流会が今年で50周年を迎え、6月に南部小学校から届けられたホタルのお礼に、11月12日、センターから南部小学校へ答礼訪問を行いました。

今年は50周年ということで、参加する利用者を多く募り、例年の倍以上の7名の利用者と8名の職員、総勢15名で訪問しました。

答礼訪問に出発する前に、参加利用者の方にはスライドで50周年の歴史や中庭のせせらぎがホタルのために作られた由来などを紹介した上での参加です。

当日は少し肌寒い天候の中、PTA、竹田ロータリークラブ、南部小学校関係者の歓迎を受けながら南部小学校の校舎へ入りました。

控え室には交流が始った第1回からのアルバムや、毎年センターから南部小学校へ贈ったトールペイントや手織りの作品が50周年を彩るように飾ってありました。

歓迎式典は、ロータリー関係者と南部小学校関係者を中心に、6月に当センターへ贈られた記念碑と同じ記念碑の除幕式を行い、その後場所を体育館に移動して、当センター利用者、南部小学校児童、教職員、PTA他多数の来賓参列のもとで、歓迎式典が行われました。

歓迎式典ではセンター利用者代表として戸石さんが挨拶を行ない、恒例の記念品は、50周年を記念する素敵な手織り作品とトールペイント作品2点を贈りました。

南部小学校からセンターにも、全校児童が作ったという折り鶴アート作品「未来へ」が贈られ滞りなく歓迎式典が終了しました。

歓迎式典の後は、毎年南部小学校の児童が楽しみにしている交流会です。例年は5年生、6年生とボッチャゲームで交流ですが、今年は50周年ということで全校児童が参加できるよう工夫された「口じゃんけんゲーム」で、利用者7名と全校児童181名が体育館で一緒に楽しみ大いに盛り上がりました。ゲームの後、先生が児童に感想を求めると、「センターの利用者がとてもじゃんけんが強くて驚いた」という感想が聞かれました。

お昼は例年楽しみにしている学校給食なのですが、今年は50周年で来賓も多いため、児童とは別に、教職員やPTA、ロータリークラブなど来賓と、お弁当での昼食となりました。利用者からは「子供たちと給食が食べられなくて少し残念」との声もありましたが、来賓やPTAの方々と、友情のホタルの歴史や、地域住民と連携して環境保全に努めている話、昔はホタルの光で、木がクリスマスツリーのように見えるほどだったという話など、竹田の自然の豊かさや、交流の歴史など色々と話しが弾んでいました。

昼食会が終わるとお別れです。全校児童が校舎から校門まで人のアーケードを作る中をセンター利用者や引率職員が見送られ、校門からバスに乗って帰途につきました。

これから新しい半世紀に向けて、引き続き変わらぬ友情と交流が受け継がれていくことを願いたいと思います。

ときめき作品展 大賞受賞

「ときめき作品展」とは、障害者が制作した絵画や工芸作品などの展覧会で、障害者に文化活動への意欲を高めてもらおうと大分県が毎年開催しているものです。今年は支援学校に通う子どもから90歳を超える高齢者までの作品299点が、大分市のiichikoアトリウムプラザにて、平成27年11月26日～11月30日の5日間展示されました。当センター利用者の戸石さんの作品が、来場者の投票により大賞に選考されました。

僕は昔から絵を描くのが好きで、部屋一面に宇宙や空の絵を描いたり、一人旅の時に持つ大きなバックには、スケッチブックを入れていました。絵が好きといっても、センスもなければ、上手くもありません。ただただ、描くのが好きなだけです。

福岡県、飯塚市の総合せき損センター（自分が回復期に入院していた病院）で、受傷して3ヶ月目くらいの時、自助具をつけて初めて自分の名前を書きました。弱い筆圧で、震えた字、あまりに時間のかかったこと、その時の感覚から絵を趣味にすることもできなくなってしまったと思いました。

リハビリを懸命に頑張りながら、東京から福岡の病院に月に一度きてくれる父親に何が欲しいか聞かれ、スケッチブックと答えました。届いたスケッチブックに嬉しくてその日のうちに絵を描きましたが、できた絵に目を伏せ、後悔し、その日以降そのスケッチブックを取り出すことは、ありませんでした。

病院から紹介され別府重度障害者センターに来るときに、絵を描くつもりはありませんでした。

利用開始当初に所内を案内してもらうオリエンテーションで、トールペイントの訓練室に行くと、同時期に同じ病院に入院していて、2ヶ月ほど早くこちらに来ていた知り合いが、花の絵を練習している最中でした。まるで絵心のなさそうな（本人談）その人がグラデーションの効いた綺麗な花を描いているのを見て自分にもできると確信しました。

しかし、いざやってみると、やはり、弱い筆圧に震える手でした。しかし、それでも、トールペイントの先生は、おおげさに思えるぐらいに褒めてくれました。（今だと褒められた言葉の中にある、ここがいまいちという指摘が分かるのですが）、分からずにも上手いと錯覚させられながら、突き進みました。ある程度自信がつき、さまざまなジャンルの絵に挑戦させてもらえるようになりましたが、様々な絵を知ることで、自分には描けない線や出せない色味に出会い、センスのない自分に気付き、苦しみながら描いている時期もありました。

ただセンスのない自分に気付いた時、そこには、絵を描くことが趣味にできている自分がいました。絵を描く時に苦しむのも、ひたすら絵を見つめどうすれば、良くなるかずっと考えていられるのも、好きだからできることです。

たとえ弱い筆圧だろうがまっすぐ線の引けない震える手だろうが、僕は絵を描くことが好きです。ただただ、描くのが好きなだけです。

今の自分にできる精一杯の技術と思いが込められた作品が、ときめき作品展の大賞に選ばれて、作品展を主催してくれている団体の方々や、票を入れてくれた方々、一緒にリハビリを頑張る仲間、トールペイントの先生、支えてくれる全ての人に、自身の嬉しさよりも感謝の気持ちでいっぱいです。

利用者　戸石　薫

第35回大分国際車いすマラソン大会

運動療法士長　木畑　聡

スタート前のラインナップ。緊張感漂う空気に包まれた中、センターからの参加選手の顔や背中にせっせと霧吹きをかけます。11月上旬なのに…。1週間前から大会当日の予報は変わることなく“雨”でした。ハンドリムがすべる、寒い等最悪の事態を想定していたのですが、空は晴れ渡り、梅雨の晴れ間を思わせるような蒸し暑さ、25度はあるでしょうか。それでも最悪の雨は避けることができ、プラスの展開でのスタートとなりました。

11月8日(日)11時03分第35回大分国際車いすマラソンのハーフマラソンの部のスタートです。今年もセンターから3名の利用者が参加しました。T51クラスでは志良堂清己さん、木下哲也さん、T52クラスでは山本孝一さん、7月からの4ヶ月間週に3回の練習を積んできました。スタミナも問題ありません。完走が目標です。

最初の5kmは坂もあり難所が続きます。沿道からセンター利用者を含む多くの方から声援を受けて力走します。山本さんは暑さで疲労困憊になりながらも、2時間00分43秒で完走を果たすことができました。志良堂さんと木下さんは、鬼門の5km関門（5kmを27分以内に通過しないと失格）にかかってしまいました。残念でしたが実力は出し切ったことと思います。3名ともセンター終了後も車いすマラソンを続けるようです。来年会場でお会いしましょう。センターからも新たな挑戦者が現れることでしょう。

小学生に対する福祉体験学習

作業療法士　岩下　裕造

当センターでは年に3、4回、地域活動の一環として近隣の小学校へ訪問し福祉体験学習を実施しています。今回は、12月8日に別府市立大平山小学校、12月17日に別府市立青山小学校を訪問して障害の理解を深めてもらうための体験学習を行いました。

大平山小学校では、当センターの利用者と職員が訪問して、利用者が車いすマラソンや車椅子バスケットなどについて紙芝居で障害者スポーツの内容を説明しました。

青山小学校では、障害体験学習としてスポーツ用車椅子の乗車体験や介助体験を行い、車椅子の操作や介助時の注意点などを学んでもらいました。

また、実際に手の機能が失われた障害者が日常生活を送るためにどのような道具を使用すれば補えるかなどを学んでいただくために書字具や更衣のための自助具の使用体験を行ってもらいました。はじめて目にする自助具を前に楽しみながら何のために使用するかを考えてもらいました。

今後も地域の皆さんを中心に障害者への理解を深められるような体験学習を継続していければと考えます。

第8回“LESPO CUP”ボッチャ大会

9月13日(日)に太陽の家サンスポーツセンターで開催された第8回LESPO　CUPボッチャ大会に当センターからボッチャクラブの10名の利用者が2チームに分かれて出場しました。週1回クラブ活動を行っており、大会が近づくにつれ練習にも熱が入り、準備万端の状態で当日を迎えました。

それぞれのチーム名は、クラブ員で考え、それぞれ「トラックアカデミー」、「ヨーグリーナ」と命名。大会出場チームは年々増えており、今年は16チームが出場。4つの予選リーグで競い合い、予選リーグで1位突破した4チームが決勝トーナメントで優勝カップを争う争奪戦です。

「トラックアカデミー」、「ヨーグリーナ」の両チームとも接戦を制し、見事予選リーグを1位で突破。トーナメント戦も順調に勝ち上がり決勝戦で両チームが激突する予定でしたが、そう簡単にはいかず、「トラックアカデミー」は僅差で1回戦敗退。

直前練習ではあまり調子がよくなかった「ヨーグリーナ」が予想に反し決勝進出。決勝では惜しくも負けてしまいましたが、堂々の準優勝に輝きました。

多少の悔しさはありましたが、練習の成果を十分発揮できて試合後は皆さんいい笑顔でした。

第13回大分かぼすカップ車椅子ツインバスケットボール大会

去る9月19～20日に別府市総合体育館（べっぷアリーナ）にて「第13回大分かぼすカップ車椅子ツインバスケットボール大会」が開催され、バスケットボールクラブ員6名が参加しました。うち一人は皮膚トラブルのためゲームには出場できず、一人でも欠けてしまうと棄権するしかないという違った意味でもハラハラドキドキする大会となりました。

かぼすカップの1日目は、博多パトラッシュ、愛媛エンジェルスと対戦し、2日目は大分ハーツとの連合チームで籠球会（福岡）と対戦。両日とも敗れてしまいましたが、随所にチームプレーも見られ、日頃の練習の成果を十分に発揮することができました。また、実力に勝るチームに胸を借りることでよい実践経験を積むことができたものと思われます。

センター終了後に地元のバスケットボールチームへ所属し、コート内を俊敏に動き回って活躍している終了者との久しぶりの再会や大会を通じて、九州及び四国から参加した全9チームとの交流も図ることができました。

第24回 文化祭

去る10月31日（土）、第24回文化祭が開催されました。

今年のテーマは「交流」。153名の方にご来場いただき、テーマのとおり地域の皆様等との新たな出会いや交流を行うことができました。

今年の特別企画は、九州補助犬協会及び介助犬ユーザーによる介助犬に関する講演・体験会でした。

介助犬とはどのようなことをサポートしてくれるのか、介助犬と生活することでどのような効果が得られるのか等について、協会の方や介助犬ユーザーから実体験を踏まえた分かりやすい説明をしていただきました。

その後、地面に落ちたペットボトルや財布、カード等を人が指示を出すことで、介助犬が拾って持ってくる等のデモンストレーション体験を行い、「初めて介助犬を見たけど、賢いな。」、「介助犬がどのようなことを行ってくれるのかが分かった。」等との声も聞かれ、介助犬に関する理解が深められたものと思います。

また、今年はメイン会場をテニスコート広場とし、特別企画や福祉車両の展示、模擬店、カラオケ大会を同じ場所に集約したことで賑わいが演出できました。そのほかに恒例の訓練紹介やスタンプラリー、車椅子スポーツ体験等の企画も文化祭に彩りを添えました。

最後に、文化祭の運営にご協力いただいた関係者の皆様、並びにご来場いただいた皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

第15回全国障害者スポーツ大会（「紀の国わかやま大会」）

理学療法士　松浦　幸三

10月24日から26日までの間、和歌山にて第15回全国障害者スポーツ大会「紀の国わかやま大会」が開催されました。私は、大分県障がい者体育協会の委託を受け、陸上競技の役員として、当センター終了者の長瀬弘太郎さんとともに大会に参加しました。大分県からは31競技に全26名の選手が参加し、金13個、銀10個、銅5個の合計28個のメダルを獲得しました。長瀬さんは2競技に参加し、50m走では2位、スラローム競技では1位（大会新記録）と、輝かしい成績を収めました。

私は、主に身体障害者の方の競技時の付き添いや、競技実施前後のアップ、クールダウン等を行いました。また、普段の業務では関わることが少ない、知的、聴覚、視覚の障害がある方のサポートを行わせていただき、大変貴重な経験となりました。今大会を通して感じたことは、頸髄損傷の参加選手がとても少ないということです。当センターにおいては、5月（もしくは6月）に行われる県の障がい者スポーツ大会に向け、スポーツ訓練において競技練習を行い、毎年10名ほどの利用者が大会に参加しています。当センター終了後も、積極的に地元のスポーツ大会に参加し、体力の維持・向上を図るとともに、同じような障害がある方との関わりの輪を広げてほしいと思います。

「紀の国わかやま大会」に参加して

終了者　長瀬　弘太郎

10月28日（水）に開催された「紀の国わかやま大会」に、大分選手団の一員として参加してきました。

開催の2ヶ月前くらいに、〈OITA〉とかかれたジャージが自宅に届いて、改めて大会に出場するという実感が沸いてきました。

僕は、陸上競技の『50m走』、『スラローム』という競技に出場しました。スラロームとは陸上競技の一つで、多数の赤と白のポールの間を前進と後進を切り替えながらゴールまでのタイムを競う競技です。大会当日の開会式の入場行進では、少し恥ずかしい反面、初めての経験だったので良い思い出になりました。

僕は、自分の実力で出場したとは思っていません。障害を負って、専門の病院でのリハビリ。その後に入所した別府重度障害者センターで、車いすスポーツに出会ったこと。入所仲間との交流や、施設のスタッフの助言や協力がなかったら、おそらくスポーツ自体していなかったと思います。

今回出場した大会では、50m走2位、スラローム1位の成績で終えることが出来ましたが、この結果はとても幸運な偶然が産み出したモノだと思っています。

まだまだどんな経験が出来るか、すごく楽しみです。

まず挑戦です！

終了者の状況

（平成27年7月1日～平成27年12月31日）

復帰形態	家庭復帰	就　職	自営・内　職	現職復帰	就労支援施設・能開校	他施設	病　院	進　学	その他	計
人　数	15	0	0	0	0	3	1	0	0	19
比率(%)	78.9	0	0	0	0	15.8	5.3	0	0	100.0

利用者募集のご案内

当センターは、厚生労働省が設置・運営する指定障害者支援施設です。主に頸髄損傷等による重度の肢体不自由の方で、市区町村から「障害福祉サービス受給者証」の交付を受けた方を対象に、社会復帰に向けた支援を行っています。

ご利用できるサービスは以下の通りです。

○自立訓練（機能訓練）

理学療法、作業療法、スポーツ訓練、職能訓練です。

利用期間については、利用開始後の評価に基づき作成した個別支援計画書に定めた期間となります。障害者総合支援法上の標準利用期間は1年6か月間です。（頸髄損傷による四肢の麻痺その他これに類する状態にある方は最大3年間です。）

○施設入所支援

自立訓練（機能訓練）を利用される方で、自宅から通所が困難な方のために、看護・介護等の支援を受けながら宿舎の利用が可能です。

詳細は、次のURLから当センターのホームページをご参照下さい。

http://www.rehab.go.jp/beppu/

なお、当センターの概要や利用申込み手続き、見学などのお問い合わせについては、下記までご相談ください。

お問い合せ先

国立障害者リハビリテーションセンター　自立支援局

別府重度障害者センター　支援課

住　所　〒874-0904　大分県別府市南荘園町２組
電　話　0977-21-0182（利用相談）
ＦＡＸ　0977-21-2794
E-mail　soudan-beppu@rehab.go.jp

発　行　別府重度障害者センター